

平成27年度福井県男女共同参画審議会開催結果

1 開催日時

平成27年7月23日（木）10:30～12:00

2 開催場所

県庁3階第4委員会室

3 出席者

(1) 委員

9名（石井委員、塚本委員、小泉委員、野添委員、法山委員、踊場委員、吉川委員、福井委員、山内委員、）

【欠席】（川岸委員）

(2) 事務局

総合政策部企画幹、女性活躍推進課長、女性活躍推進課員、男女共同参画推進会議幹事課員、生活学習館職員

4 概要

議題1 第2次男女共同参画計画（H24～）の主な事業と成果

(事務局)

説明

(委員)

世代に応じた意識改革と理解促進に関する施策は、特に今後の意識改革という意味では非常に重要。中学生向けセミナーを開催しているが、中学生以外に小学生や高校生等を対象とした研修の機会などは企画しているか。

最近テレビで小学生が赤ちゃんと触れ合う機会を設けているというプログラムが紹介されていた。そのプログラムは小学生の高学年に、赤ちゃんを抱っこしたり、おんぶしたり、ミルクを飲ませたり、非常に実践型のプログラムであった。中学生では遅いということではないが、もし可能であれば小学生からも、何か男女共同参画を理解できるようなプログラムがあるのではないかと思った。

(事務局)

現在、小学5年生向けに啓発用のパンフレットを配布している。

(委員)

パンフレットはどのような機会に小学5年生に配布しているのか。

(事務局)

パンフレットの活用例としては、総合科目の授業などで使っている。

(委員)

次世代セミナーは、4校に実施しているが、こちらから要請して受け入れた学校に行っているのか。それとも計画的に行っているのか。

(事務局)

ふくい女性財団の事業として毎年継続しており、学校は計画的に選定している。

(委員)

福井市には、男女平等に関する副読本があると聞いている。

また、福井市が市内7つの小学校を対象に意識調査したところ、「男は仕事、女性は家庭」という意識は、男子47%、女子40%でかなり高かった。昔から刷り込まれた意識があり、政策として行っても、なかなか根付かない現実がそこに出ていると思う。小学生を対象として、少し教育というか意識改革の施策を進めてもよいのではと思う。

(事務局)

福井市の方は男女平等の教育も、県内市町の中でも進んでいると聞いている。そうしたところも参考にさせてもらう。また、教育委員会とも協力していきたい。

(委員)

小学生が小さい子と関わるのは非常に大切な体験。私が勤める園でも積極的に受け入れている。少子化ということもあり、最近の子供は小さい子と関わるのが少ないため、より男女共同参画と少し離れてしまうことを危惧している。幅広くこの意識改革を行わないと男女共同参画は難しいと感じている。園に来た小学生に聞くと、保育士になりたいという男子も増えている。若い世代のうちから男性が保育士をしても良いんだとか、女性でも消防士になりたいなどという夢を持つ機会があるのも非常に良いと思う。こういう機会をいろいろなところに広められたらと思う。

(事務局)

保育園に来る小学生は学校からの申し込みがあつて来るのか。また、何年生が来るのか。どういうやり方でそうことが実現できているのか教えてほしい。

(委員)

当園は小学校と隣接していることもあり、全学年を受け入れている。学校も大きい規模でないこともあり、今後、校区を広げて、中学生も夏休みになったら受け入れる予定。来たいという方には交流の場を設けてあげられたらと思って企画している。

また、男性は働いて女性は家庭でという意識が、大きくなると周りから固められているということがあると思う。若い世代ならなりたいという夢がまだ勝っているうちに、意識改革が少

し進めば良いと思う。

(委員)

男女共同参画の意識について、私は小学校で実際に、配布されたパンフレットを使って、授業をしていた。例えば、お母さんが疲れて仕事から帰ってくると、子どもが泣いているが、お父さんは「ごはんはまだ？」と言って新聞を読んでいる。では、あなたはどうする？といった感じの漫画形式で書かれているため、子どもたちにもわかりやすい。主に5、6年生の授業で使っていた。年度の終わりには、どんな教科・領域で何回ぐらい使ったか調査が来る。調査があるから使わないといけないという思いもあるが、そういう縛りがあるから授業で扱う機会を増やすことができるという意味では良いことだと思う。

赤ちゃんを抱っこする経験というのは、総合的な学習の時間に取り入れている学校がある。主に命との関わりを学ぶために行っていることが多い。最近、子ども達の命に関する意識がかなり多様化しているので、赤ちゃんの抱っこ体験などを通して、自分もこんなに小さくて大事にされて育てられたんだとか、お母さんやお父さんたちはどんな思いで自分を育ててくれたんだろうと考える機会にしている。

職業観を育てるということに関して、高校で行われている「ようこそ先輩」というのがある。その学校を卒業して活躍している方が在校生に話をする。最近は中学校や、小学校でも地域の先輩が来て話をする機会が増えてきた。例えば、女性だけど白バイ隊の隊員になっている方が、実際に白バイを持ってきて話をしてくださった。女性として体力的に苦しいこともあるがやりがいもあるという話から、自分の夢に向かってがんばることの大切さについて伝えてくださった。このように、学校では、男女共同参画意識と職業観を育てるための取り組みを行っている。

(委員)

アメリカの小学校1年生のクラスで、命を大事にする宿題があった。生卵を持たされ、それを割らないように何日間持って学校を行き返りする。授業中も机の上に置いて、休み時間も持ってできるだけ壊さないように大事にする。実際に赤ちゃんとか連れてくるのは難しいが、これは意外と簡単にできる。こういったレベルからも何かできるのかと思う。

(委員)

福井県が平成22年に行った意識調査では、福井県は女性の労働力率が日本一と高いにも関わらず、「男は仕事、女は家庭」という意見への賛成が全国平均よりも多かった。実際には、男は仕事、女は仕事も家庭もとなっていると思う。女性が仕事、家事、育児、介護とすごく多重負担となっているのが福井県の現状だと思っている。福井県では女性の就業率が高いのに、管理職は少ないというのも、結局、女性に家事責任や育児責任があるので、どこかで女性側が折り合いをつけることを求められているからだと思う。全国的には、一旦仕事をやめるM字型カーブになる。福井の場合は、働き続ける条件は、県や市町の努力で整っているが、キャリアアップを断念する形で、折り合いをつけていると思う。

そういう意味では、女性の活躍促進と言った時に、意外かもしれないが、家事を男性もできるような状況を整えていくことが非常に大事だと考えている。「男が仕事、女性が家庭」という

考え方に、否定的な男性は家事をするが、女性が否定的であっても肯定的であっても女性の家事分担量は変化しない。要するに、社会通念として女性に家事責任や育児責任があると考えられている時に、パートナーの男性がやらなければ、結局女性がやらざるを得なくなってしまう、女性の考え方が変わっただけでは、女性の家事負担に影響しない。男性が変わっていかねばならないことが多分にある。

福井県では、成人男性向けには家事検定という全国的にも新しい面白い試みをしている。しかし、もう少し小さい時から行うことが重要で、小学校では総合学習の時間があるので、そこで小学生に実際に考えてもらう。結婚して共働きをする場合、家事や育児をどのように分担するのが良いかということをお子さんの時から考えてもらう場を用意する。子供の頃から意識を変えていくことが重要だと思う。

(委員)

男の子も家事や料理を抵抗なくやっていくことを小さい頃から刷り込むことが非常に重要。昔は、中学校で男子は技術、女子は家庭科しかないと、そこで分けられていた。今は共通だと思うが、自然に男子は技術、女子は家庭科を行い、学校の段階から分かれていることで、どうしても古い意識が残っていく。私は息子には料理も洗濯も自分でできるように身につけさせようと思っている。自然にできるようにということが大事だと思う。

(委員)

中高での家庭科の必修は20年ぐらい前から。20代後半、30代の男性は家庭科を必修した世代となる。ただ、研究的には、家庭科を必修したことが、実際男性の家事や育児参加に役立っているような結果はまだ出ていない。ただ、必修することによって、事例として、もっと家事をやりたいようになったということで、やり始めたお父さんたちはいるというのはある。

また、国連で2003年に、男性と男児に対する意識と行動の改革の専門家会議が開催された。これからの意識を変えるのは、もちろん女性の意識も重要であるが、家庭内の役割分担などに関しては、男性や男児の意識、特に男児の意識を変えていかねば、何も変わって行かないといった結論だった。

男性の意識に関しては、家事検定以外にあまりまだ活発にやられていない印象だが、男性の家事参加の試みを検討してはどうか。

(事務局)

家事参加に対する取組みはまだ余地があると思っている。家事チャレンジもクイズ形式で入口としての事業であり、実際の行動にどうつながったかといった追跡調査までは出来ていない。行動変化を起こすための仕組みをやらなければいけないと思っている。その辺もご意見いただけるとありがたい。

議題2 企業における女性活躍の推進について

(事務局)

説明

(委員)

私の会社は工場が主体で約6割が女性。こういう中で、なかなか難しいのは、一つは逆に女性の方がその組織の中で管理職を目指して、あるいは工場の一つの部署の中で実質的なリーダーシップを取っていくことについて、会社として女性の力のある人になってもらうように誘導すること。そういう人たちに是非とも管理職になってほしいと思い、取締役女性を一人入れたが、女性の期待する人がなかなか乗ってこない問題がある。女性の方にも積極的に変わってもらうため、こうしたことを一生懸命行っている。

また、会社では保育園も行っている。私が理事長で、26名の職員がいるが、男性は私のみ。男性の保育士を採用したいと思っている。ここから得られる経験をひっくり返すと、女性が男性社会にどうやって上がっていくか、それにはどうしたらよいかはわからないかと思っている。

(委員)

自分の周りで保育士になった男性の話をつらとると、非常に居心地が悪いのが実情。いかに自分で意心地良くするのが第一条件。個人的な思いだが、保育の技量を上げるよりも、いかに女性の中で生きていく技量を高める方が、自分の保育人生を長くする秘訣だと、若い保育士には伝えている。保育の技量は、日々子どもとの接し方や研修、先輩から教わるなど高めていくことができる。しかし、女性の中で働くのは誰も教えてくれないため、自分で開拓していくしかない。大体、保育施設は昔から女性が使っていた場所なので、男性、女性はない。子どもたちにとっても、保育にとっても男性がいるのは、非常に良いことだと思う。

(委員)

福井は共働き率が日本一だが、女性の管理職比率が41位。なお、日本は管理職比率が非常に低く、欧米は3割で高いというのが現状。ある調査では、男性は43%ぐらいが管理職を目指したいが、女性は12%ぐらいしかいない。なぜかという点と家庭との両立が非常に難しい。男性が家事にどれだけ進出し、女性を支えていけるか、負担を軽くするのにつきると思う。この辺りが、女性が管理職を目指さないネックだと思う。

(委員)

私は管理職であったが、定年1年早く退職した。辞めるにあたって、この後の女性管理職の登用が低くなったらどうしようと悩んだ。この年代となってくると、介護や孫の世話など携わらなければならない事情が出てくる。私の周りで管理職を目指さなかった人たちも、介護や家庭のこともあり、それを考えると、とてもできないということであきらめていた。管理職はこうあるべきだという考え方を少しずつ変えることや、もっと働き方を自由にするということも、管理職を目指す人にとっては、少しはメリットになるのかもしれない。

(委員)

ある調査では、まだ管理職や役職についていない男女に管理職になりたいかという意識調査をすると、男性の方が管理職になりたいという率が高いと結果が出ている。なりたくないと言っている男女になぜなりたくないかの理由を回答してもらくと、男性の理由はすごく後ろ向きで、忙しくなるとか価値がないとの回答。しかし、女性は現状として育児や介護との両立があって、さらに管理職となると時間が足りないことや、会社に管理職の女性がいないため、どういう風に工夫すればそういうポストにつけるのか、モデルがないからわからないという理由が高いとの結果が出ている。

その辺り、やはり女性で優秀な人がいるのになかなか管理職等になってもらえないと、先ほど社長は言っていたが、取締役に女性を活用するなど、いろいろ工夫されている。しかし、企業は女性になりたがらないからということで、そこでひっこめてしまう企業が多いのが現状だと思う。

このため、労働局では、均等法や育児介護休業法、次世代育成法という法律があり、今度、女性活躍新法ができるが、法律で義務になっているからやってくださいだけではなく、少子高齢化がスピードアップしている状況の中で、女性を活用することが会社にとってもメリットになることを理解いただく形で進めている。

最近、介護の問題も大きく、福井は今、住みやすい、子供を見てくれる祖父母がいるとか三世同居率が高いところは、今は長所という形でアピールしているが、これから後10年もすると介護する人が足りないということになる。今も育児で離職するのがほとんど女性だが、男性の40、50代で、介護でやめる人が増えている現状がある。介護は明日来るともせず、そこで対応というのも難しい。育児の場合は、妊娠がわかってから会社も従業員も準備が進められるので、まず育児から両立できるような環境作りをやっていくのが大切だと思う。

会社が変わってもらおうということもあるが、やはり小さい時からの男女別の役割分担意識が解消されないと、女性の方も私がやらないとという思い込みを持つということもあるので、小さい時からの意識啓発に力を入れていただけると良いと思う。

(委員)

福井県は日本一共働き率が高い県だが、共働きの家庭と女性が家事専業の家庭とで、家事の実施頻度を比較したところほとんど差がない。女性の場合は働いていようが働いていなかろうが家事も育児も介護もという多重負担にどうしてもなっている。これだけ女性の就業率が高く、正社員比率が日本で2番目に高く、労働時間も一番長い県で、管理職率が低い理由は、家事責任や育児責任とキャリアアップの両立が難しいということが非常に大きな理由となっている。

「働く女性の活躍に関する調査」に関しても、仕事の面もちろんだが、家事分担や育児分担の部分がかせとなっていることが多々あると思うので、そのあたりを突っ込んで聞いても良いと思う。

福井は3世代同居率が日本で2番目に高く、県境またぎでの人間の移動が少ないので、また、3世代近居というパターンがすごく多く、その辺が福井で子育てしやすい理由になっている。3世代が同居しなくても、近くに親世帯が住んでいて、何かあった時にサポートしてもらえると

いう形になっている。逆にいうと、子育てを協力してもらったから、介護は自分たちで看ないとという形になってくる。主体的に選べば良い話ではあるが、孫守りをしないといけないから女性の働き方とか地域活動とか色々なところが制約されるなど問題も出てくる。やはり、女性の活躍推進といったときに、仕事面だけ、家庭内だけではなく、育児や介護の社会化、社会的なサポートを厚くし、女性だけの負担じゃない、家庭だけの負担じゃないというような、社会で支えるようなシステムを作っていくのが非常に重要だと思う。

(委員)

この調査に関しては、特に女性の従業員に対する調査の中に、問11の質問で、なぜ管理職を希望しないかというような項目がある。回答の中に「仕事と家庭の両立が難しいから」とある。この質問では、仕事と家庭の両立が困難というのが、一番回答が多いと予想する。ただ、このデータをとって、仕事と家庭の両立が困難だからと終わるのではなく、それを規定する要因は何かを分析すれば、今後の施策に非常に有効だと思う。

(委員)

おそらく仕事と家庭の両立が困難だというのが人の意見だと思う。なぜ管理職になると仕事と家庭の両立が困難になるかということ、昇進していくということは、長時間労働を厭わずバリバリやる、転勤も厭わない。長時間労働や転勤が前提だという働きが固定概念にある。そうではないというような管理職のモデルができていない。やはり女性は、家事は手抜きできても、育児と介護は手を抜けないのが現状で、なかなか両立が難しくなってくる。

その中で、一つは小さい時から地道に意識改革をしていくということがあるが、なかなか一朝一夕にはいかない。アウトソーシングできるような環境づくりを社会でしていかないと、現実問題として介護や育児から逃げられない。社会でそれを支えていく環境を作らないと、いろいろ旗ふられてもできない。そういうところから行政がサポートしていかないと現実問題として進まないと思う。

(委員)

未来きりりプログラムに参加している女性たちは、現在あるいは近い将来リーダ的な存在になるという方だが、以前グループディスカッションをした時、親への感謝はたくさんあったが、夫への感謝は一グループもなかった。私の感触では夫にやってもらるのが難しいのが、非常にひしひしと伝わってきた。男性の意識や行動を変えていかなければならないと強く感じた。

議題3 その他（地方創生・人口減対策について）

（事務局）

説明

（委員）

県の主な施策ということで、地域の縁結びさんが若い男女をマッチング、縁結びさんを住職や職場に拡大とあるが、これは具体的にどのようなことを行うのか。

（事務局）

県においては、お見合い相手を紹介する結婚相談所というのがある。県が婦人福祉協議会に委託し実施しており、県内28か所に相談所がある。相談員は180名弱いる。さらに、それをボランティアでやっていただく「地域の縁結びさん」を4年ぐらい前から初めて100名いる。あわせて約280名。お見合いは年間1800件で、成婚数は100件に達する。

住職は、福井県はお寺と神社の数が人口比で全国一多い。各地域にお寺や神社があり、地域の顔役として事情を承知しているのではないかとということで、働きかけをしている。

職場の方にも縁結びさんを増やそうと今年からやり始めている。各社の先輩が独身の後輩に声を掛けて、合コンをセットしてどんどん出会いの場を広げていこうと、「結婚応援企業」への登録を呼びかけている。あらゆる分野で出会いの場を広げようとしている。

（委員）

放っておくと結婚できない。若い人達に社内結婚を何としてもさせようというぐらいのつもりで、会社入ったら三月以内に35歳ぐらいまでの者で歓迎会をやっている。以前は、同じ職場で社内結婚した場合、配置転換を行っていたが、社内結婚で優秀な職員が配置転換せざるを得ないのは理にかなわないため、そういうことは変えていく。会社としても努力して結婚を進めることは良いと思う。

議題3 その他（ふくい女性活躍支援ポータルサイトについて）

（事務局）

説明

（委員）

先ほどから男性の家事とか育児に関する話が出てきている。外部から見たら福井の女性は、もっと管理職になってもらいたいという課題は残されているが、すでにたくさんの方々が職に就いている。しかし、男性が意識も含めてあまり変わっていないように感じる。ここに男性の家庭内での取組みを紹介するコーナーがあってもよいのでは。

（事務局）

男性がいかに家事参加するのかということは非常に重要だと思う。そういったテーマも取り

上げて発信できるように考えていきたい。

(委員)

政府では育メンプロジェクトを立ち上げて、2010年からやっている。育メンパパの紹介や育メンパパが働く企業の紹介など福井の独自のをポータルサイトで掲載してはどうか。女性の活躍は女性だけががんばっても達成しないと思うので、検討していただきたい。